

第三十二回 北海道新聞文学賞

小説「湯灌師」(河出書房新社)

木下 順 一 様(69)

北海道札幌市、クラウン建築設計人



「小説家というものは、このつとやらの強迫的な仕事。それが評価され、報われるという気持ちです」。喜びをかみしめるように話す。奈良(だ)に付られる前の身体。生と死の目録の境界に位置する存在。その身体を突き合い、そんな仕事ゆえに生きた体が恋しく考へている。「死体は魂が残っている」といふ境地に達する湯灌師の姿を「湯灌」「湯配」「湯火」の三編連作で描き綴った。朝想も含め一回で完結する十往還かかるといふ作品だ。

湯灌師は、結核性胸膜炎で亡くなった右腕を大黒(くろい)い腕から交換。義足(ぎそく)になった身体がある。一切の痕に似た湯灌師太(たか)。

「最初の一編で提示した死にまつわる期間の説明、いわば後を駆け抜けなければならない作品」と語る木下さん。



北海道新聞文学賞正賞ブロンズレリーフ「休息」(東) 國枝明田香氏制作

夢さる懸念している間に時間。二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。